

## 第九章 立ち向かう勇氣

「……………」

傘もささず、たた雨に曝される。

インターフォンは開かれたまま。ただ、その向こうには誰も居ない。

二階の優奈の部屋の明かりは消えたままだ。

「ちょっといいかな？」

男の声だった。振り返ると警官が居た。駐在所でいつものんきにお茶を飲んでいるお巡りさん、寺岡だった。

「はい、なんででしょうか？」

「ええと、確か君は田所さんのところの子だよな？ 市川さん？ の家から連絡があつてね、それで、ちょっとお話を聞かせてもらいたいんだけどいいかな？」

「……………なにも話すことなんて無いです」

「何もつてことは無いでしょ？ それにここにずっといたら迷惑になっちゃうし、風邪ひいちゃうよ。ね？ 一旦、駐在所に来てお話ししようよ。そのほうがいいよ。ね？」

物腰は柔らかだが、肩を掴む手は力強い。いつもはのんびりしているように見えて、どつしりとしていた。

「……………先輩、連れていきましようか？」

もう一人、若くてガタイの良い島倉が声をかける。

「まあそっういいいなさんな」

「でも、こいつは強姦したって……………」

「俺じゃない！！」

かっとなって叫んだと同時に、島倉が和正を押さえつける。

「おいおい、乱暴するんじゃない」

「寺岡さん、こいつは反抗的です。していないのであれば話せるでしょうが、こいつは拒みました」

「そういう短絡的なせいでここへ飛ばされたんだらうが……………まったく……………もういい、田所君、すまんが、駐在所に行くよ？ いいね？」

「……………」

どちらの説得も無理だと考えたお巡りさんはひとまずずぶ濡れの和正を引き取ろうと、パトカーに乗せた……………。

駐在所に連れていかれた和正はしばらく奥の部屋で待たされていた。

刑事ドラマのように訊問をされるのかと思いき身構えていたが、電話の応対が聞こえる程度でほっとかれた。

何もすることもできずにいると、時間が長く感じられる。アナログ時計は休みなく働いているのに、五分が一時間にも感じられた。

「……」

立ち上がり、聞き耳を立てる。

「……はい、ええ、今こちらの駐在所で保護しておりますが……。ええ、そうですか。ではご両親に来ていただいてですか。わかりました」

部室で喧嘩をして、さらに同級生の強姦容疑を掛けられた。真実はともかく、まずは親が呼ばれるだろう。

黙秘を続ければ不利になる。けれど真実は話しづらい。優奈の辛い事なのだから……。足音が近づくので和正はそろりと元の椅子に座り直す。ドアが開いて寺岡が顔を出す。

「田所君、今、親御さんに電話したよ。お母さんが来るから、今日は帰りなさい」

「……え？」

てつきり親を交えて絞られると思っていたが、意外にも開放を告げられる。

「どういことですか？ 俺は……その、優奈と……、それに野球部とも……」

「鬼瓦第二校からは特に被害届は出ていない。市川さんも勘違いだったと言っているんだ」

「そんなのおかしいです。俺は……あいつらを……、野球部の奴らと喧嘩したし……」「まあ、若いうちは喧嘩ぐらいするだろう。それに野球部は県大会の決勝だっていうじゃないか？」

「どういう意味ですか？ 野球部が県大会行くから隠せつてことですか！？」

「それを決めるのは私じゃない。被害者だ。鬼瓦第二校は今回の事を内密にしたいし、市川さんのお宅も勘違いだと言っている。我々は被害届も無しに動くことはできないよ」

「そんなのつてあるかよ！ 優奈は！ 優奈はあいつらにひどいことをされたんだ！」

「だが、その分、君も彼らに酷いことをしたのだろう？ ならお互い様じゃないか」

「知ってるんなら俺を逮捕しろよ！ そしてあいつらも逮捕しろ！ お前ら警察なんだろう！」

「我々は警察だが、被害届が無ければ動けない」

「なら俺が出す！ 優奈があいつらに！ ……あいつらに……」

「なあ田所君、君の気持ちはわかる。好きな子が酷いことをされたんだろう。だが、それを騒いでどうなると思う？ こんな小さな村で噂が立った日には、その子は針の筵だよ？ 理不尽な話だが、女の子がイタズラをされるといことはそういうことなんだ。男には理解できないかもしれないけれど、警官という職業柄、そういうのをよく見た。一つ理解してもらいたいのだが、こういう質の事件は周りがどう思っているかを当人が気にすることで二次被害が発生するんだよ。君がどう思おうと、周りが気にしていなかったとしても、本人の……疑心暗鬼というのかな、そういうのが追い詰めるんだ。そうさせないた

めには、事件自体を隠すしかないんだよ。辛いだろうけど理解してもらいたい」

「そんなのおかしいだろ！ 臭いものにふたをしてるだけじゃないか！」

「その通りだ。だが、君の言うとおり事件を表ざたにしてどうする？ よく考えてみたまえ。どうするのが市川さんの娘さんにとって良いことなのか……」

「優奈は！ 優奈だって……優奈は……。ちくしょう、わかんねーよ！」

怒り、無力感に苛まれる和正。近くの机を叩き、嗚咽を漏らす。けれど正解は見つからない。ただただ叫ぶだけ……。

「……和正？ 一体何があったの？」

警察から連絡を受けて急ぎやって来た母は、慟哭する和正に戸惑いを隠せない。

「……！！！」

ざりりと歯ぎしりをする。そのままかみ砕いてしまいそうなぐらい強く。それでも力みをおさえきれず、同時に駐在所を走り出ていた。

どこへ向かうあてもなく、とにかく雨の中を走り出ていた……。

——停学だ。

——野球部の県大会出場、お前のせいではあだよ。

——どう責任とる？ 取れるわけないだろ。

——先生な、ほんとと愛想つきたよ。いくらバカだと思ったが、ここまで馬鹿だなんてな……。

——野球部の顧問が被害届取り下げてくれたから警察沙汰だけは勘弁してやるってよ。感謝しろよ。本当なら前科者なんだからな。

——ああそれと、連帯責任ってことで水泳部は部活停止だ。全部お前のせいだからな。

月曜日の午後、補習も中断して下された結果だ。

事件は表ざたにならなかったが、和正の暴行で負傷した三人は奮わずに七回裏コールド負け。もともと分不相応なナインは打ち崩される酷い試合だった。

県大会決勝戦とあって校内総出で応援に駆り出したものの、一方的に打ちのめされる不甲斐ない試合に校長は真っ赤になり、次第に青くなり、終了を待たずに帰ってしまった。

応援に来ていた在校生・卒業生も制服姿でいるのすらいたたまれなくなり、一人二人と立ち上がるのを見て、最期には吹奏楽部が練習の為に残る程度。

その原因は野球部と水泳部の部員同士の喧嘩として吹聴されていた。

せめてもの救いは、その陰で慰み者にされた子の話が出なかったこと。

寺岡の言葉が痛いほど身に染みた和正だった。

夏休み明けの鬼瓦第二校、停学を言い渡された和正は荷物を取りに教室へやってきた。彼が教室に入ると同時にしんと静まり、そしてすぐにひそひそと囁かれ、突き刺す視線が向けられた。

「……あいつのせいだ」

「……野球部殴ってばかじゃね？」

「……あいつ、自分が水泳部干されたからって野球部に嫉妬したんだよ」

「……ばっかだー、それで水泳部まで部活停止とかほんと頭悪いよねー」

「……そんで自分は停学だって。そのまま退学しちゃえっての」

「……校長先生真っ赤だったもん。ゆでだこみたいに怒ってたし、そりゃねえ……」

「……野球部可哀想。せつかく全国行けたかもしれないのにさ」

「……なんか野球部顧問にも暴行したっぼいよ」

「……ほんと最悪だよね、暴力男」

机を見ると「死ね」「暴力男」と彫刻刀で掘られていた。荷物置き場には墨汁がぶちまけられていた。

「……」

芳雄も春子も俯き、ただじっとしていた。

それでいいと思った。和正に付き合っても意味がない。火中の栗を拾うようなもの。二人はこれからもここで生活するのだ。その足枷になりたくない。できれば、我儘だけど、自分の代わりにあいつを守ってほしい。そんな身勝手な気持ちは伝えられず、誰も居ない机を交互に見ていた。

「……何をしているのかしら？ 君は停学中でしょ？ さっさと出ていきなさい」

法子のヒステリックな声に未練はないが、鍵の件をややむやにされることが悔しかった。

「……」

言われなくても出ていくと、和正は荷物を背負う。

「待ちなさい。何か言うことがあるでしょう？」

「……」

無言で睨み返すと、法子は怯んでいた。

「そ、そうやって問題ばかり起こして、いい気味ね。君みたいな落ちこぼれはどこへ行っても通用しないわ。せいぜい社会の底辺でもがいていけばいいわ。みなさんも田所君のことを反面教師にして同じ過ちをしないように気を付けましょう。それでは提出物を……」

疎外感だけを背中に受け、和正は教室を出た。

そこには顰め面をした教頭と嬉しそうな杉田が居た。

「教頭先生、だから言ったでしょう？ こいつは根っからの不良生徒なんですよ。言っ  
てきかないケダモノなんです。だから私は責任をもってですねえ、心を鬼にしてスパルタ

教育を施しているんです」

「……田所君、君がどうしてあんなことをしたのか、私はまだ聞いていないんだが、教えてくれないか？」

嬉々として語る杉田を無視し、教頭は和正の視線にかがんで尋ねる。

「どうせ大した理由じゃないですよ。部活停止の憂さ晴らしかなんかでしょ？ 聞くだけ無駄です。こういう奴には体罰でしつかりと身体に教え込まないといけないんです」

「……すみませんが、言えませんが」

もし、告げたらどうなるだろう。きっと事実確認で優奈にも聞き取りが行くはず。優奈は出来事について語るのが平気なのだろうか？ きっと辛い記憶のはずだ。済んだことと割り切ることとはできないが、済んだことにするために遠ざけるしかない。

仮に訴えたところで、明るみに出たところで、それでも優奈はこの村で生きていくのだから……。

和正は一つ賢くなったつもりで首を振った。教頭はため息交じりに首を振り、それ以上は何も聞かなかった。

「……そうか。すまないが君の停学について、私は何も庇うことができない。君が何を守りたくて、何を我慢しているのか、それを汲むしかできないのは私の逃げなのかもしれない。すまない。君に辛い選択をさせて……」

「すみません」

「……養護教諭はカウンセリングもしている。当然、守秘義務についても理解している。

もし、君が自分で抱えられなくなったら、停学中でもいい。保健室を訪れたまえ」

「はい、ありがとうございます」

「教頭先生、そうやって甘やかすからつけあがるんです。こういう問題児はびしっとですねえ！ ……あ、おい、田所！ まだ話は終わっていないぞ！ 大体そういう舐めた態度が人を……」

まだ続きそうな杉田の説教など無視し、和正は背を向ける。停学中なのだから指導も停学してもらいたいと、階段を降りた……。

事件から一週間。夏休みも明け、ようやく身体のたるさ、気持ち悪さが薄れてきた。両親には何も話していない。けれど、何が起きたのか理解しているはずだ。

肌に刻まれた赤い染みと、塗りたくられた白い濁り汁、鼻に刺さる臭い……。

何かを聞こうとすると母は「貴女は何も心配しないでいいのよ」と言う。それは嘘だと思った。何もしゃべらないで、なのも心配させないで……。そう聞こえた。

父はやつれたような表情で何か言いたげだったがけれど、母を気遣うように口を閉ざす。何があったのか、二人とも知っている癖に……。

「……優奈？ 起きてたの……」

「うん。もう学校行く時間だし……」

「……そう、そうよね。そろそろゼミの方にも戻らないと。勉強の遅れを取り戻さないとね。夏風邪なんかに負けちゃだめよ」

「はい」

そう思い込みたいのだろう。そう思うことで問題を先送り、無視して時間だけを進ませる。そうして記憶を遠くに置き去りにして、そうやって小さく見せる。

数学の授業で聞いたことがある。限りなく小さくすれば、それを0と同じにできる。0は数字ではなく。記号。無いことを表す記号。存在しない。けれど、それは一体どれだけ遠くなれば0になる？

「……」

久しぶりの学校。久しぶりのゼミ。二ヶ月前ならざる休みなどできなかったのに、腫れものを見るように母は寛容という名の放置をする。

今日だってタオルケットを被っていれば、何も言わなかったのだろう。

「……」

何の為に行くのだろうか？ わからない。何に立ち向かうというのだろう。立ち向かって何になるのだろうか？

腕を見る。細くて白い、赤い染みは消えたけれど、あれの鈍い固さと熱は今も覚えている。もう忘れられない……。

「いやああああ!!!」

叫び鞆を投げる。それはバウンドして時計にぶつかる。ショックでスヌーズ機能が作動したのか、部屋にじりじりとベルの音が響く。

「……優奈、どうしたの？ 大丈夫？ 嫌なら学校には行かなくても……」

物音に驚いたのか、母が階段を駆け上がり、ドアも開けずに尋ねる。

「平気。大丈夫だから心配しないで……」

心配しているのではない。母は心配しているのではない。どうしていいのかわからない

のだ。だから安易な逃げをしているだけ。  
なら、自分だってその背中を見て同じ生き方をできる……？

久しぶりの教室。夏休みボケも醒め始めたのか、普段の活気を取り戻しつつあった。けれど、優奈が教室へ入ると、喧騒が薄れていく。

「……ねえ、優奈ってさ……」

「……うん、田所に……」

「……レイプされたんでしょ？ 最悪だよね、田所」

「……可哀想だよね」

「……そう？ むしろいい気味じゃない？ だって最近なんかうざかったし」

「……田所なんかに同情するからじゃない」

「……所詮野良犬に情けをかけても噛みつかれるだけじゃん」

「……自業自得……」

優奈を遠巻きにヒソヒソと陰口を叩くクラスメート達。同情的な色もあるけれど、和正と違って反撃されることがない為か、嫉妬混じりの声も小さくない。

「……」

ちらりと周りを見ると、途端に口を閉ざす。けれど、すぐにまた……。

幼稚園の頃、だるまさんが転んだをした時を思い出す。

とろい自分相手に皆はくすくすわらってタツチしに来ない。きっとだるまさんがころんだと言っている間に馬鹿にしていたのだろう。そんな時、庇ってくれたのは彼だった。思えば彼の喧嘩っ早さの原因は全て自分にあった。

「ふふ」

思わず吹き出してしまう。

「……なに笑ってんだろうね」

「……頭おかしくなったんじゃない？」

もともとこんなものだった。自分と周りの関係は……。

進学して、勉強がステータスになったから一目置かれるようになっただけ。何も改善なんてしていない。一度亀裂が入ってしまえば、そのまま崩れて割れる脆い陶器の器。

「起立……」

ホームルームが始まり、千絵が号令をかける。後期のクラス委員は彼女になったようだ。彼女が熱心に見ていたゼミのテキストは、ついこないだまで自分が使っていた色のもの。

「おはようございます。そろそろ夏休み気分も抜けてきたみたいですね。気を抜かないようにみなさん気を付けてください。もう皆さんは身体付きも大人なんですから、精神的にも自立を目指してください。落ちこぼれるのは簡単です。くだらない喧嘩をして……」

法子は言いかけてはととする。昨日まで空席だったはずの場所が一つ埋まっている。けれど、それが俯いたままの優奈だと気づき、ほっと胸をなで下ろす。

「それでは今日も一日、気を引き締めて過ごしましょう。クラス委員、号令」

「はい、きりい……」

「待ってください」

文雄の声を遮り、右手を上げる優奈。

「市川さん、今日は出席しているようですね。夏の疲れが出たのはわかりますが、体調管理も……」

「先生、水泳部の部室の鍵の紛失の件、みなさんに説明したんですか？」

「え？ あのねえ、市川さん、今はその話をする時間ではないでしょうか？」

「ではいつするんですか？ ホームルーム以外のいつなんですか？」

「市川さん、鍵の件はもう終わったことじゃないですか？ そうやっていつまでも蒸し返すようなことを……」

「鍵を失くしたのは和正君じゃなくて先生だったそうじゃないですか。先生は和正君に鍵の紛失の濡れ衣を着せました。そのことを訂正してください」

教室の中がどよめくも、法子が出席簿で教壇を叩いて遮る。

「確かに……、先生が鍵を預かっておりましたが……」

「失くしたんですよね」

「市川さん！ そういう言い方は無用な混乱を招きます。控えなさい」

いつになく食い下がる優奈に法子はあからさまに不快感を見せる。

「先生が鍵を紛失して、そのせいで女子更衣室が荒らされたんじゃないですか。なんでそれを和正君のせいにしたんですか？」

「それは……だから、田所君が鍵を複製した可能性があるじゃない。彼は普段から生活態度も悪いし、だからそういう疑いを……」

「原因は先生が失くしたからじゃないですか？ どうして責任を逸らそうとするんですか？ そういうの、卑怯じゃないですか？」

「市川さん、貴女はまだ体調が悪いようですね。クラス委員、ええと、相沢さん、付き添ってあげなさい」

「はい」

「誤魔化すんですか？ 卑怯です。それが責任のある大人のことなんですか？」

「みなさん、席に着くように。礼は省略します。それでは授業が始まりますので集中するように」

法子は言い切ると足早に教室を去る。

「優奈、ほら、行くよ」

「……」

体調など今日まで一週間寝て起きて夢うつつで過ごして来たのだ。気怠さはあるけれど、



健康そのものだ。体調面だけだが。

「ほら、早く」

腕を取り、強引に引っ張る千絵。まるで厄介者を……、いや、厄介者そのもの。無理やり引っ張って行こうとする。ついこないだまでは友達だと思っていたのに……。

「……うん」

周囲の視線がとげとげしく刺さるのを感じる。

そうだ。

自分が新たな厄介者なのだ。

「……優奈、ああいうのやめなよ」

「どうして？」

「今更田所なんか庇ったってしょうがないよ？」

「しょうがなくなんてない。和正君は私のこと、助けてくれたもん」

「どこが？」

「……どこがって……私のこと……」

「あのさあ、もう皆知ってると思うよ？ そういう噂って広まりやすいもん」

ずきりと胸に痛みが走る。電撃のような鋭く、焼き焦がす痛み。

覚悟していたつもりだけれど、改めて言葉で言われると堪えるものだった。

「……そう、なんだ」

「……だいたいさあ、優奈も優奈で田所なんかのこと構うから目を付けられるんじゃない。そういう浮ついたことをしてるからいけないんだよ？ 自己防衛できないなんてさ……ま、優奈が勝手に転ぶのはアタシには関係無いけど？ おかげで特進クラスに入れたし」

「そうなんだ、おめでどう」

「優奈も良かったじゃない。進学クラスなら田所と過ごす時間が増やせるよ？ 落ちこぼれ同士、仲良くできるじゃない」

「そんな言い方って……友達じゃない」

「ふう……。あのさあ、優奈、そうやって友達だとか言うのやめてよ。これまではさ、そりゃ優奈も追いつけ追い越せの目標だったけど、もう追い抜いたわけ。そうやって田所君がくとかやってる間、あたしがどれだけ苦労したかわかってる？ わからないよね。そろそろ進路とかも考えないといけないんだし、同じクラスだからとか同じゼミだからとか子供のころからの付き合いでくなんていうガキ臭いことやめたいの。付き合い方もそろそろ改めたいのよ」

「……お母さんと同じこと言うんだね。千絵の言うことは変だよ」

「どこが変なの？ 言っただらんさいよ」

「だって、そんなの、おかしいの」

「ふん、負け犬の遠吠えね……。色々あって辛いにはわかるけどさ、自分だけが辛いなんて思わないでよね。昔から優奈ってばそういうところあったけど、自分ばかりかわいそうアピールばかり。ほんとウザイ。いつも誰かに頼ってさ。ああ、そっかそうやって田所と共依存してたんだね。幼い関係のまんまじゃん。進歩無いよ」

「……そんなことない、ないもん」

「言っただけ？ あたしは先行くけどさ。あんたみたいに泣いて誰かに慰めてもらうの待つような弱い女じゃないし」

保健室も見えぬままに踵を返す千絵。

「あたし、授業に戻るから。ゼミの課題、終わらせたいし、いつまでも優奈に構ってたくないの。保健室ぐらいひとりで行けるでしょ？ いちいち手を煩わせないでよ」

「……」

背を向ける千絵は振り返ることもしない。

言い合って、気持ちが昂って売り言葉に買い言葉ではない。きっと彼女は昔から……。

「昔から……そうだったかな……」

おもちゃを取り合う自分と千絵の姿を思い出す。あの頃からずっとそうだった。今までずっと我慢していたのであれば、そのうっぶんが奔流となつて噴き出したのだろう。

「……」

涙を流せば良いのに。友達だと思っていたのに、彼女は自分を切り捨てて去って行く。彼女を責めるのは筋違いだけれど、逆恨みも止められない。

「はい……」

いつの間にか辿り着いた保健室、中からは松子の声があった。

「どうかしたの？ 貧血かしら？」

「はい、少しふらついて……」

「……そう。もし必要ならお家の方に連絡をして……」

養護教諭には守秘義務がある。だけど、知っているのであれば態度に出る。隠せていない、母と同じで腫れものを扱うように、できれば家に帰ってもらいたいのかも知れない。それで彼女を責めるのは酷だ。彼女は和正を助けてくれたのだから。

「少し休みたいんですが、大丈夫ですか？」

「ベッドなら空いてるわ。ええと、市川さんよね？ その、いろいろ大変だったと思うけれど……」

「平気です。ただ、ちょっと疲れちゃって……」

「そう。うん。その……」

松子は戸棚からファイルを取り出し、パラパラとめくっていた。優奈は自分に関係無いと、遠慮なくベッドへ行く。

「あ、まって市川さん……。寝ながらでもいいけど、その……。こういうの、興味無いかしら」

ファイルには笑顔で映る同い年くらいの男女の写真があった。

「……？」

「ええと、その、ごめんなさいね。その、なんて声をかければいいかわからなくて……。それに、責任を放棄して逃げるみたいで後ろめたいのよ。でも、その……」

「ありがとうございます。読ませてもらいますね……」

パンフレットをファイルから取り出し目を泳がせる。頭には入って来ない。意識していないと文字も記号にしか見えない。

「……」

最近はずる休みして寝てばかりいた。だから、寝る時間でもなくても眠くなる。よくない癖と思いつつ、今は惰眠をむさぼりたい。どうせ教室に戻ったところ……。

十

放課後になり、目が覚めた。手元に置いていたはずのパンフレットが無い。起き上がり枕もとを探すと、服に違和感があった。着たまま寝ていたせいで紐がずれたのかもしれない。

「んう……」

背伸びをしてあくびをする。はしたないと思いつつ慌てて手で隠す。何か口に絡まる。唾が乾いたのだろうか、口元を擦るとばらばらと塩のように落ちる。そして、季節外れのコオロギの足なのか……。

「……！！」

布団を剥し、立ち上がる。いつの間にか松子は居なくなっていた。部屋を出ようとする

と鍵がかかっている。内鍵なので難なく開くが……？

「わあ！！」

「きゃあ！」

ドアを開けると、たまたま戻って来ていた松子と杉田がいてぶつかりそうになる。

「すみません、その、慌てて……」

「いえいえ、こっちもノックもしなかったから……。それより、もう体調はいいの？」

「はい、おかげさまで……」

「まったく、ようや学校に来たと思っただけなんだ。たるんでいるぞ？ まだ夏休み気分が抜けていないのか？」

「……すみません……」

「杉田先生、市川さんは病み上がりなんだから、そんな厳しい口調で言われたらぶり返します」

「そうやって甘やかすからたるんでいくんです。聞けば市川君は今日一日中保健室に居たわけじゃないですか。そんな安直な逃げをしては自立が遠のきます」

「そうはいいですが、年々保健室通いの子も増えているんです。我々はそういった多様な問題に対応してですね……」

「多様性は認めます。けれど、私の教育論は違うのです。健全なる精神は健全な肉体に宿ります。自らを堕落させていけば気も身体も乱れる一方です」

「立派な感得方ですね。ぜひご自分で実践なさってください」

「一方的な精神論ばかりを翳す杉田に松子はほとほとんざりしているようだった。本来なら最新の教育論の読み合わせをしているはずなのに、彼の理屈は20世紀初頭で止まっているらしい。」

「市川君、君も困難から逃げようなどとせず、立ち向かつてはどうなんだ？ フリースクールなんて集団生活の出来ない我儘な落伍者のたまり場ではないか？ 市川君の前期の成績は立派だったのだから、そのような……」

「……！！」

「先生、お言葉がすぎますよ。フリースクールは決してそんなものではありません。集団生活を学び直す場としての機能があります。それを我儘だの落伍者だの……、貴方は教育論の何を学んでいるのですか？」

「所詮は机上の空論です。実践するのが教育の本懐でしょう」

「その実践の場の一つとしてフリースクールが出たわけじゃないですか？ 杉田先生は世界が狭すぎませんか？ よくも知らないものをあたまごなしに……」

「先生、私、教室に戻ります」

さらに白熱しそうな議論の前に、優奈は話を遮って一礼する。

「あ、ああはい、ええと、ごめんなさいね。まだいろいろ辛いでしょうけど、市川さん、その……」

「はい。いろいろとありがとうございます。よくわかりましたから……」

顔をあげ、ちらりと杉田を見る。彼の目線は掛け違いの第二ボタンと第三ボタンの隙間の……。

十

教室に戻ると、既に授業は終わっていて、掃除の真つ最中だった。

もう合唱も無いというのに春子が掃除を押し付けられていて、それを芳雄が手伝っていた。その姿はかつての自分と……。

「あ、市川さん、もういいの？」

芳雄が気付いたらしく、ぱたぱたと駆け寄って来る。彼にもお礼を言いたいのだけれど、一方で彼らの夢を潰したのも自分。

「ええ、もう大丈夫」

「そっか。うん」

お調子者の彼だけれど、続く言葉が見つからないらしい。彼もあの場所に居たのだから当然だろう。

「市川さん、戻って来たなら掃除手伝いなさいよ」

今朝まで友達だと思っていた子が当番表を示して言う。

「おいおい、病み上がりの人間にそんな言い方しないでいいだろ？ 市川さん、掃除なら俺が代わりにやるよ。俺、しばらく活動ないし……、あ、別にそういう意味じゃなくて」

「ありがと。でも大丈夫だよ。渡辺君に迷惑ばかり掛けられないし」

「迷惑だなんてたかだか掃除ぐらい。前期も勉強教えてもらったし」

「野球部のこと、私のせいだよ」

「……いや、そんなことは……ないよ。俺だってその……色々やったしさ」

「ごめんなさい」

芳雄には一言謝っておきたかった。彼のおかげで……彼のせいで……？ いや、彼は悪くない。悪いのは他にいくらも居る。それに、許せないのは他に……。

掃除当番の班員をじっと見つめる。問い詰めなければならぬ人が居るのだ。

視聴覚室は広く、他の箇所比べて時間がかかる。

未だに机すら運ばれていないところを見ると、予想した通りだった。

「……」

箒を手に部屋の中央を掃いている小太りの眼鏡の子。

「一人で掃除してるなんて大変だね」

「……！ なんだ、市川さんか……。なにか用かい？ 僕は今、掃除が忙しいんだ」

「どうして一人なの？ 他の子は？」

「皆は部活が忙しいって言うからね、だから代わってあげたんだ」

自分をよく見せようとして受け入れているわけではない。自分の中で自分が押し付けられたと思いたくないから受け入れているだけ……。

「そうなんだ。でも、嫌なことはちゃんと嫌って言わないとだめなんじゃないの？ 嫌なことから逃げていちや成長できない。前期に筒井君が私に言ったよね？ 皆には言わないの？」

「皆は試合が近いっていうし、だから……」

「だから何？ 忙しいのは皆一緒だよ？ それなのに筒井君は何も言わないんだね。」

んーん、言えないんだよね。怖くて」

「！ 怖くなんか……ない。いい加減なことを言うな僕はそんな弱虫じゃないだみん

なが忙しいって言うから暇がある僕がかわってあげただけで言い返せないからなんかじゃないんだぼくはみんなの」

息継ぐ暇も惜しいのか早口で言い返す姿は滑稽だった。彼がよく陰口で根暗豚眼鏡と言われていたが、ピーピー騒ぐところなんかはよく当てはまっている。確かそれを言っていたのは千絵だったはず。彼女は昔からそういう人なのだろう。

「だいたい君はなんだ遊び歩いて事件起こして都合が悪くなってる休みする卑怯者じゃないかそんな君が僕に説教する気か特進クラスをおちたくせに馬鹿なんだよお前はお前みたいな落ちこぼれが僕に話しかけるないや君みたいなヤリマンなんか僕には相応しくないんだそうとも君なんか誰とでも寝ればいいんだ僕の前に現れるな」

「どうして、夏祭りの夜、誰も呼んでこなかったの？」

早口でわめきたてる言葉は聞き取りにくい。会話の成立は諦め、聞きたい事を聞き、反応を見る。

「どうしてって別に僕はそんなことしないといけない理由がないじゃないか僕はそうだからちゃんと人呼んだんだでも誰も居なくなっていたんだだから僕は悪くないんだ」

「パンツ脱がされた私を置いて？」

「パパパンツはなんだよ僕はなにもそんなこと知らないんだ」

「返してもらってないよ」

「知らない知らないそれにあんな子供っぽいパンティばかり穿いて恥ずかしくないのか君はバカみたいな動物プリントなんてさははは君は頭の中までガキなんだよ馬鹿が話しかけないでくれ」

「ねえ、どうしてあの時、あれが私のパンツだってわかったの？」

「なんでってそんなのあたりまえじゃないか君はああいうガキ臭いパンツばかり穿くんだからな」

「私、教室では基本的にブルマ穿いてるよ。みんなもそうしてる。たまに体育の後で穿かないこともあるけど、いつも穿いてるよ」

「だからなんだよそれがなんだって言うんだ」

「なんで私が動物プリントのパンツばかり穿いてるって知ってるの？」

「は？」

「あの時も筒井君、大崎君に言われる前に気付いたよね。クマさんのパンティが私のだった」

「それは、だから、あの場所で、君しか、ああいう、パンティ穿く、人、居ないって思った……から、で……」

「でも、それだけでばっかりなんて言うの？ 一度だけで？ 今日は違うよ？ ほら、

水玉だ」

優奈はべらっとスカート捲し上げる。せめて文雄だけはと煽っていた。

「……僕は、その……だから……言葉のあやじゃないか、そんなことで僕を疑うの

か」

「何を？ 私は何を疑えばいいのかしら？ 何か後ろめたいことがあるとか？」

「後ろめたい、ことなんて……ない……ないんだ。僕は、何も、していない……」

「本当？ 私聞いたよ？ 和正君が鍵を返しに行った時、誰が居たか。和正君も渡辺君も盗難事件が起きた日のことばかり気にしてたけどね、それって違うと思うんだ。本当に重要なのは鍵が無くなった日だよ。鍵が無くなった日って委員会があったよね？ 浜崎先生に議事録届けに行くって言って職員室行つたの、筒井君だよね？」

「それがなんだって言うんだ……ほ、ぼくは、べつになにも……してない……」

「和正君が鍵を浜崎先生に預けて、筒井君がそれを盗んだ。だから紛失騒ぎが起きた。そして例の日、水泳の授業で和正君が席を外したところを見計らって自分も出た。女子更衣室へ忍び込むために。そこで私のブルマを盗んだの、筒井君でしょ？ だから私が動物プリントのパンティ穿くの知ってたんだよね？」

「知らない、そんなの知らない！ 僕じゃない！ 僕はそんなことしてない！」

「嘘。そんなこと言ってもダメだよ。しらばっくれたって証拠があるもの。和正君達が調べてた日、ブルマを無理やり和正君の鞆に忍ばせたのって筒井君だよね？ もし平気なら、あれに付いてた黄色い染み、調べても平気だよね？ 個人でもDNA検査ってお金出せばできるもの。お年玉溜めてるから10万円ぐらい払えるよ」

「そんなDNA検査だなんて……、そんなことしたって無駄だ。お金の無駄だよ。時間の無駄。どうせ、だれも、そんなこと……」

「筒井君がブルマ泥棒の犯人だってわかったらさ、どうなるかな。皆筒井君のこと守らないと私は思うな。だって筒井君、人望無いもん。無いから皆掃除を押し付けるんだよ。自分じゃどう思っているか知らないけど」

「そんなことあるもんか！ 僕は、人望がある！ だからクラス委員だって任命されるんだ！ 君はどうだ？ 大崎にも負けて相沢さんにも負けて、田所と一緒にやりまくってるだけのヤリマン馬鹿女じゃないか。そんな奴が何を言つたって僕は」

「じゃあ警察に行く」

「け、けいさ……待って！ 待って、市川さん、話し合おうよ……ね？ お願い、待って……」

取りすぎる文雄だが、片付けていない机に邪魔をされて阻まれる。このまま逃げられては身の破滅、そう思い伸ばす手に力はない……が、優奈は出入り口でとどまっていた。それどころか再び教室に戻って来た。

「市川さん、良かった……、わかってくれたんだね……」

言いかけて新たな絶望が訪れる。彼女を押しとどめたのは文雄の人望でも人柄でも無い。

「へへ、面白いこと聞いたかったよ」

「なんだあ、鍵泥棒ってインテンチヨだったんだ。ふーん、そうなんだ。なるほどね」

「っていうかさ、優奈ちゃん、マジ名探偵？ スゲーじゃん」

「……通してよ。私、帰らないと」

「いいじゃんいいじゃん、イインチョも色々話したいっほいしさ……。それにさ、そういう生意気なことされると俺らも困るのよ。わかる？ お前さ、もしかして復讐しようとか考えてるんじゃないの？」

「なんの事かしら……。私はただ事実関係をはっきりさせないと和正君が疑われたままだから……」

「野球部の奴らにレイプされてやけくそになってんしよ？ っていうか、どうだった？ 気持ちよかったんじゃないの？ ねえ？ どうなんだよ？ おら！」

浩司は容赦なく優奈を突き飛ばす。床に伏す優奈は突然の暴力と痛みで蹲る。

「おい、閉める。鍵かけんの忘れんな。あと電気消せ」

「お、おう……」

口頭で脅すだけだろうと思っていた大吾は浩司の乱暴なふるまいに若干気圧される。だが、逆らえば自分がどうされるかわからない。大人しく強がって言うとおりにする。

「やめて……来ないで……」

「だって優奈ちゃん、警察行くとか言うんだもん。気になっちゃうじゃん？」

「……」

「そういや優奈ちゃん、あいつらにレイプされたんでしょ？ 体験人数プラス三だけ？ 俺と先輩達で四人か。あ、田所は？ あいつとはしてないとか？ ねえ？」

ずけずけと心に踏み入る浩司に優奈は唇を噛む。

二人ならきつと掃除をさぼって近寄らないと思っていた。文雄一人なら問い詰めることもできると思っていたのに……。

「なんかさ、優奈ちゃん、今朝からおかしかったじゃん？ 前ならあんな風に噛みつかなかったのにさ……。ちよつと気になってついてきたわけ……。そしたら文雄？ お前さ、なに？ 下着ドロだったの？ かー、だっせえな……。んで、優奈ちゃん、警察行くの？ それともただの脅し？」

「……本気よ。警察行くつもりだもん……」

「あっはは……。野球部の奴らに何もできないのに警察行くの？ 行く勇気ないくせに強がっちゃってかわいね〜……」

防音加工の壁に吸い込まれる浩司の高笑い。部屋の中、彼だけが笑っていた。

「……ね、今日はどんなんはいてんの？ 見せろよ」

スカートを掴み、ぺらりと捲る。

「やめてよ！」

咄嗟に押えるが、浩司はそれを許さずに叩き落とす。

「いた……いた……」

「お前さ、自分の立場わかってる？ つかさ、ほんと馬鹿だよ。浜崎詰め寄って泣きそうになってたじゃん。ぶっちゃけ嗤い堪えるの大変だったわ。まじウケルもん」



「……くっ……」

「ふーん、今日は水玉のパンティか。まだまだガキ臭いけど動物プリントよりは成長したよねー。もう子供じゃないもん。4人？ 5人と経験しちやってるんだもんね」

「……してないもん」

「え？ してない？ なに？ まさか田所としてないとか？」

「和正君のこと悪く言うのやめてよ……」

「あっはっは……へー、そうなんだ。ふーん、まだしてないか……。4人ねえ……なあ、なんか縁起悪くね？」

「……？」

「4つてさ、やっぱ死とか連想するじゃん？ このままじゃ体験人数四人のままじゃさ、お前死ぬよ？」

「なに馬鹿なこと言ってるのよ……、やめて……こっちこないで……」  
後ずさりする優奈だが、背後の何かが遮る。

「おい、イインチョ、お前さ、こいつとやりたくないか？」

「……筒井君……？」

振り返り、見上げると、蒼白で目をぎよろぎよろ動かす文雄が居た。彼はブルマ泥棒、女子更衣室侵入がばれたこと、知られてまずい相手に知られたことで目の前の暴力などに映らないらしい。

「おい、イインチョ！」

「え！ あ、なに、なんですか？」

荒ぶる浩司の声に文雄は丁寧な口調で返す。彼の本性らしい、卑屈な紳士ぶりだった。

「ちょうどいいや。お前さ、こいつとやりたいっしょ？ なあ？」

「やり、やり？ いや、そんな、僕なんかそんなこと……」

尻込みする文雄だが、ヤルという言葉に股間が不自然に膨らんでいた。

「いいじゃん、やっちゃえよ。こいつさ、かなり締まりいいよ？ もしかしたらチンポねじ切られちゃうかもな。っていうかさ、今コイツやっとなないと、お前警察に言われるよ？」

「警察に？ どうして……？」

「……だからさ、ったく、これだから勉強馬鹿は困るわ……。いいか？ こいつはさ、野球部の先輩にレイプされたのね？ だけど、怖くて警察に言えないんだって。言ったら皆に知られちゃうからな」

「うん、うん」

人望・人脈の無い文雄は野球部、先輩という言葉に反芻し、優奈の胸、スカートを見て鼻息を荒げていた。

「お前の場合、ブルマ盗んで？ そんな水泳部の部室に入っただけじゃん。それってさ、別に知られてもこいつ痛くないじゃん？ だったらさ、警察行けるじゃん」

「あ、そっか……」

「そしたらお前、やばいじゃん」

「うん」

大きく頷く文雄に大吾もさすがに笑ってしまう。それを知っているのが、これで二人増えたというのに……。

「だからさ、今ここでこいつレイプしちゃうんだよ。そうすればこいつ警察いけないじゃん？ レイプされたこと、警察に言えないんだからさ」

「……そっか。なるほど」

「筒井君……嘘でしょ……ねえ……」

「だ、だって、市川さん、警察に行くって……。僕はずっと頑張ってたんだ。勉強だって、皆に馬鹿にされてもがんばって、特進クラスに入って、勉強して、いいところに入って、そして！ その為にもこんなところで……。君みたいな落ちこぼれの負け犬なんか邪魔されるなんてないんだ！ 僕は君なんか足引張られたくないんだ！ 悪いのはお前だ！ だから一回ぐらいやらせてくれたっていいだろ！」

「やめて！ いや、こないで！」

膝ですり寄る文雄。その手が胸に触れそうになったところで払い退ける。けれどそれが精いっぱい。立ち上がって逃げたいはずが、震えて力が入らない。

「いいじゃん。前は優奈さん、文雄君って呼びあってたラブラブカップルだったんだしさ。一回ぐらい思い出エッチさせてやれよ、な？」

後ずさる途中、肩を掴まれる。見上げると浩司の下卑た顔があった。

「優奈さん、いいよね？ 大崎君達ともしたんだし、一回ぐらい僕にもさせてよ」

慌てた手つきでベルトを外すのもままならない文雄。ぶちりと音を立ててボタンが飛ぶ。でぶつとした下腹と、白の、すこし黄ばみのある、尖った先が滲んだブリーフを見せた。

「いやああああ！！！！」

西日が射しこむ視聴覚室。窓枠の影が実像より大きな影を映す。部屋の真ん中、円を描いて並ぶ机。中心では供え物のように横たわる優奈と、股間を出しっぱなしで放心した文雄が居た。

皮が剥けきれないチンポの先からは白い濁り汁の残りが垂れていた。

その滴る糸の先はむき出しのままの優奈の太ももの方に途切れながらも繋がりが伺える。声は無い。仮に叫んだところで視聴覚室は防音加工されているから誰も気づかない。誰も来ない。

「よ、おつかれさん！ どうだったよ？ 初体験」

呆然とする文雄の肩をばんばんと叩くと、それにつられてチンポが揺れて白い濁り汁がズボンに着く。

「うわ、きったねえ……。つか、ホント真正って剥けねーの……。ちっさいし早いし、ほんと最悪だな」

「……はあはあ……」

侮辱されつつもそれどころではないらしい。

初めて触れる女、密かに心を寄せていた彼女へ想いを遂げられたこと。勢い任せに踏み込んでしまった非日常へのライン。文雄は恍惚の表情で天井を見ていた。

「絶対に許さない……」

優奈がぼそりと呟くと、文雄はびくりと肩をこわばらせる。興奮していたとはいえ、自分は一切何をしてしまったのか？

ブルマ泥棒ならば出来心で済ませられたかもしれない。けれど、レイプはれっきとした犯罪。いくら浩司達に背中を押されたとはいえ、許されるはずもない。

「あっはっは、何をどうゆるさなのかな？ 優奈ちゃん」

「……………」

煽る浩司に優奈はただ身体を抱きしめ、せめて泣くまいと唇を嚙む。

「おい、どうする？ 大吾。お前もやっつく？」

「……おれは……いいよ」

「かー、なんだよ、ダッセーな。これだから童貞は……」

「だって、嫌じゃん。イインチョコのきったねえザーメン塗れのマンコにいれんのさ……」

……

「あー、そうかもなー？ つていうわけで、今日はこれで終わりだつてさ。おつかれさん。ちゃんとマンコ洗ったらさ、今度は大吾の相手してやれよな？ だっはっは！」

太ももから垂れるザーメンを見て鼻をつまむ仕草をして大笑いする二人。

「……こんなことして……筒井君、平気なの？」

「……な、なにが？ なにがだよ。いい加減なことを言うな……僕は何も……」

「……だって、二人とも、君が私をレイプしたの、見たんだよ……」

「ん？ なになに？ そうやってイインチョを脅して味方にするつもり？ほんとせつこいこと考えるね。でも無駄だから……。なー？ 俺ら友達だもんなく？」

文雄の肩を掴み、頭をぐしゃぐしゃとかきむしる。

「まあなんだ、いわゆる友達料もらっておこうか？ なあ？」

「え、お金ですか？」

「そうだよ。金。お前もその方がいいだろ？ 俺らに金払ってる間は友達です。友達の悪い事は黙ってます。お互い痛いところ掴みあったほうがいいじゃん？ わかんだろ？」

「……は、はい……そうですね」

「ま、そういうことだから？ 優奈ちゃん、また今度溜まったらよろしくね。それまでにちゃんとおまんまんキレイにしといてよ。俺、他人のザーメン塗れのマンコに入れる趣味ないからさ」

「あつはっは！ ちょうけるわ」

「はーあ、おつかし……。んじゃ、イインチョ、お前、来週までに三万な」

「三万……も」

「んじゃな。ちゃんと片付けとけよ。くせーからさ」

絶望を押し付けると浩司達は今度こそ教室を出る。四階外れにある視聴覚室に用のある者もいないだろう。けれど、誰も来ないとも言切れない。

「……ぼ、僕は……僕は……」

二人の姿が見えなくなつて冷静さを取り戻した文雄だが、事の重大さにまた早口になる。

「僕は悪くなんかない全部大崎だ田所だあいつらが不良でばかなことばかりしてるからそれで僕は巻き込まれただけだせつくだって無理やりそうだ無理やりだじゃなかったら僕があんなヤリマンなんかとセックスするはずないんだ僕は悪くないんだ」

必死に繰り返して自分に言い聞かせる。現実にはなにも変わらない。優奈の割れ目から滴るモノも……。

「ひっ！」

立ち上がるもガクッと膝が折れる。慌てて立ち上がろうとしてズボンに足を取られる。

何度か床と格闘しながら、視聴覚室から逃げ出した。

逃げられる場所など、もうどこにもないのに……。

「……………」

一人残された優奈はただしばらく呆然と、焦点の定まらない瞳で前を向いていた。不思議なことに涙がでない。

泣くことができたなら、声を上げることができたなら少しは変わったのだろうか？

気持ちも……、結果も……………。

